細川英雄著

自分の〈ことば〉をつくる

あなたにしか語れないことを表現する技術

ディスカヴァー・トゥエンティワン、2021年発行、238p.
ISBN：978-4-7993-2775-3

古賀　和恵

1．はじめに

本書は、「自分のテーマ」を発見し、考えていることを「自分の〈ことば〉」で表現するための考え方とプロセスを示したものである。サブタイトルに「あなたにしか語れないことを表現する技術」とあるが、単なる技術や方法を手取り足取り指南したものではない。著者が長年日本語教育において探求してきた思想が随所に盛り込まれ、表現することの意味と可能性を切り拓く書となっている。ビジネスパーソンも含め、学生、教育関係者など幅広い読者に向けて書かれており、様々な立場・環境にある人が表現するということについて考えるきっかけを提供している。以下では、私自身の読み取りをもとに本書の概要を示したうえで、意義と課題を述べる。

2．本書の構成と概要

本書は、「まえがき」に続き、第１章から第３章、「エピソード　自分のことばで語るときまで―千葉くんの挑戦」、「あとがき」、「参考文献」という構成になっている。エピソード「千葉くんの挑戦」は、著者がかつて高校生を対象に行ったレポート作成活動の参加者・千葉くんの活動体験記である。この活動は、本書で示されている考え方に即して行われているため、読者が具体的な活動をイメージする際の助けとなる。また、各章内各節の最後にはコラムが掲載されており、読者をより深い理解へと導いてくれる。

2.1　まえがき

「まえがき」では、まず「自分の〈ことば〉をつくる」とは、自分にしかできないことを表現することであると述べ、「『考えていること』を『ことば』にする」、「自分のテーマ」、「対話」といった本書のキーワードを提示しながら、著者が考える表現という活動の概略が示される。また、読者に対し、表現「方法」を自分の外にある解説本やマニュアル本に

求めるのではなく、「それぞれの社会での相手とのやりとりの中で、表現すべき内容と自分との関係にしっかり向き合」（p.4）い、自分にしか語れないことを表現しようと呼びかける。これまでの書にはない、新たな表現の活動へと読者を誘い入れる導入となっている。

2.2　第１章　自分のテーマを発見する

第１章は、冒頭で、表現において大切なことは、「自分のテーマ」を「自分のことば」で語ることであると述べられる。続く第１節から第３節では、自分のテーマを発見し、表現活動を展開していくプロセスが示される。

「１　自分のテーマとは何か」では、「自分のテーマ」について考える出発点として、「オリジナリティ」が取り上げられる。著者は、自分にしかできないこと、すなわちオリジナリティを表現という活動の中核に置く。後述するが、この点が本書の大きな特徴である。オリジナリティとは、「他からの借り物でない、自分の考えとその表現」（p.25）である。思考と表現はその人固有のものであり、それゆえ人はみな世界に一人だけの存在である。だからこそ、著者は表現という活動において、自分にしかできないもの、オリジナリティを求めるのである。ただし、オリジナリティは、はじめから自分の中にあるのではなく、他者とのやりとりを通して次第に形づくられていくものであるという。そして、その人固有のオリジナリティが自分のテーマをつくっていくと述べる。さらに、自分のテーマの源泉を自分の好きなこと、興味・関心に見出す。なぜなら、人は自由に生きたいと願いながら、自分の好きなことにもとづく興味・関心に即して行動しているからである。

「２　『好き』から問題意識へ」では、前節を受け、興味・関心から自分のテーマを発見し、テーマをめぐる表現活動へと至るプロセスが示される。すなわち、「興味・関心→問題関心→問題意識→自分のテーマ→表現活動」（p.48）という流れである。ここで言う表現活動とは、テーマに対する自分の考え・主張を他者に向けて発信する活動と捉えるとよいだろう。自分のテーマは、興味・関心に即して生活や仕事をする中で芽生えた何らかの思い・疑問といったものが少しずつ一つに焦点化され、意識が向けられることによって見出される。また、上記のプロセスは、行きつ戻りつ循環しながら進んでいくという。注目すべき点は、表現活動においては、自分の経験をテーマに対する主張の根拠・具体例として示し、テーマと主張を結ぶ必要があるとしている点である。自分の興味・関心から見出したテーマである以上、根拠もまた自分の経験に根ざし、しっかりと自分を通したものである必要があるということであろう。そのために、経験を記述し、ポートフォリオ化することが提案される。それを公開し、他者との対話、自分の経験との対話を通して振り返ることが有効であるという。こうして、他者とともに自分の過去・現在・未来をつなぐ自己表現を行い、互いの考えていることを交換し理解し合うことは、自身の生を充実させていくことにつながると述べる。そのため、自己表現はキャリア形成そのものであるとしている。

「３　『なぜ』を問う意味」では、上述の循環プロセスにおいて重要となる「なぜ」という問いについて考察される。「なぜ」は、自分のテーマを形成し、主張として言いたいことを明確化する問いだという。「なぜ」と問いながら他者をも巻き込んだブレーンストーミングを行い、思考と表現を積み重ねていくことがテーマ発見と主張のオリジナリティへとつながっていく。また、ここでは「論理」についても触れられる。テーマ・具体例・主張は、

論理的一貫性に支えられていなければならない。それは、他者を説得し、納得させつつ言いたいことを共有し、他者との関係性を形成することを可能にする。また、「論理」は、考えていることを他者に伝えようとする対話のプロセスで生まれるとしている。つまり、表現することは、他者を志向するものであるがゆえに「論理」が必要だということである。

2.3　第２章　自分のテーマを表現する

第２章では、第１章で論じられた自分の興味・関心にもとづくオリジナリティをいかにしてことばにし、表現するかが示される。

「１　『内言』をどう『外言』化するか」では、思考を表現化するプロセスに焦点が当てられる。まず、頭の中でのつぶやきや思考＝内言が、他者に向けて表現されることば＝外言となるプロセスが説明される。そのうえで、テーマを発見するためには、内言を外言化すること、すなわち思考と表現の往還しかないと述べる。思考と表現の往還を活性化するためには、他者との対話が不可欠であり、対話を通して考えていることが徐々に把握され、他者に伝わるものになるという。このようにして、互いのオリジナリティを共有し、認め合い、影響し合い、捉え直すこと、そこに表現することの意味があるとしている。

「２　〈私〉をくぐらせる―『自分の問題として捉える』ということ」では、テーマと自分との関係についての考察がなされる。著者は、あらかじめ外から与えられる「出来事や事柄の話題」（p.102）をトピック、「さまざまなトピックを自分に引きつけるための、自分の中の意識」（p.102）をテーマと呼ぶ。自分のテーマに即し、自分のことばでトピックについて表現するためには、トピックを「自分の問題として捉える」（p.106）こと、つまり当事者意識を持つことが必要であるという。それによって内言の外言化が促され、問題意識を持って、説得力のある自分のことばで明確に語ることが可能になるとしている。

「３　テーマと主張」では、「私」を出すという問題が取り上げられる。従来、表現することにおいては、「私」を排し、客観的に述べることが重視されてきた。したがって、「私」の視点から考えることは主観的であり、客観的なものにならないという批判が予想される。それに対し著者は、なぜそのことを取り上げるのかという「私」自身の問いがなければ、テーマの取り上げ方や掘り下げ方が類型的なものに陥ってしまうと反論する。興味・関心から問題意識へと至る流れの中には、当然「私」が織り込まれており、何らかの事例を切り取り、取り上げることそのものが主観的な行為であるとして、「無自覚な『客観性』神話」（p.118）の問題点を指摘する。そして、重要なのは主観か客観かではなく、「私」に固有の視点からテーマについて考えたことを表現し、他者を説得できるかどうかであると述べる。

2.4　第３章　自分のテーマで対話する

第３章では、本書で繰り返し言及される「対話」に焦点を当てつつ、テーマに対する自分の主張を具体的にどのように他者に提示し、対話活動を進めていくかが示される。

「１　主張と対話」では、まず、テーマと主張は問いと答えの関係にあることが述べられる。それは、自分と他者に問い、根拠を示しながらそれに答え、相手からの応答があり、それにまた答えていくというプロセスである。したがって、表現活動とは対話活動であり、コミュニケーションのプロセスそのものである。「なぜ」と問いながら他者との

対話（インタビューやアンケート、文献を参照することも含まれる）を積み重ねることで、思考と表現がスパイラルに展開し、説得力を持った結論になっていく。重要なことは、表現活動を通して、他者との信頼関係が結べたという達成感を得ることであるという。そして、それは他者との共存・共生を図っていくことにつながるとし、表現活動の可能性を示す。

「２　自分の主張とは何か」では、まず、他者に提示する表現のまとめ方として、「問題の所在（動機・はじめに）」「本文（具体例）」「結論（自分の考え）」（p.153）という構成が示される。しかし、大切なのは最終的なかたちよりも、プロセスであることを強調する。また、ここでも表現活動における公開性に言及し、責任ある発信者として、開かれた公共の議論の場に参加することが重要であるとしている。さらに、表現活動とは、自己を振り返り、自己存在の意味を確認し、対話を通してよりよい自己表現を目ざす活動であることから、生活や仕事と表現を統合することが重要であると述べる。そのうえで、表現活動は、生活や仕事の中で考えたことややりたいことなどを一つの知としていくことを可能にし、それはまた、人間としての普遍的な知の構築につながるとしている。

「３　社会をつくる個人として」は、全体のまとめである。以下では、経験にもとづく自己表現を行うことの意味に焦点を絞り、３点挙げる。一つ目は、自分の興味・関心のありかを考えることにより、「自分の生きるテーマを見出す」（p.177）ことにつながることである。二つ目は、他者の価値を認め、他者とともに社会とどのように関わっていくかを自分のことばで語る「社会性・自律性のある個人」（p.180）、すなわち「市民」を形成することである。三つ目は、表現活動を生活や仕事に取り込むことによって、将来の方向性を見出すことができ、不安を抱え方向性を見失った状況を乗り越えることを可能にすることである。こうした考えにもとづき、著者は自分の主張を持ち、社会のあり方に積極的に関わろうとする市民がことばを使いながら自由に活動できる社会を構想する。そして、最後に、自分の経験を自分のテーマとして示すことで対話を形成するという考え方を一人ひとりが持つことによって、「表現活動ははじめて他者とともに生きることをめざし、よりよい社会をつくるという方向性を持って動き出す」（p.194）ということばで本書を締めくくる。

３．本書の意義と課題

本書の意義として、日本語教育に携わる者に自身の実践の振り返りを促すという点を挙げたい。その契機として着目した点を、私自身が突き付けられた問いをもとに２点述べる。

一つ目は、オリジナリティを表現活動の出発点に置いている点である。著者は、人がだれでも持つその人固有のオリジナリティに目を向け、それゆえだれもが世界に一人だけの存在であることを強調する。この、人はみな唯一無二の存在であるというゆるぎない確信は、強く太い根となって、著者が考える「表現」という大きな木を支えている。この徹底した著者の姿勢は、唯一無二の存在にあなたはどのように対峙しているかと私たちに迫る。例えば、レポートや論文などを書く際にも、当然オリジナリティが求められる。しかし、それは往々にしてかたちとして「表現されたもの」のオリジナリティであることが多い。また、「日本語」教育であるがゆえに、ややもすると目に見える「日本語」に目を向けがちである。どちらがいい／悪いということではなく、見ているものが根本的にまった

く異なるということである。もちろん、私たちは誰もが日本語を学ぶ人それぞれの存在を大切に思い、日本語を学ぶことが何らかの自己実現につながることを願いながら、一人ひとりと真剣に向き合っているに違いない。しかし、著者のオリジナリティへのまなざしには、「あなたの考えていることは何？」と問いかけ、互いの存在をかけた関わりを求めようとする切実さ、覚悟とも言うべきものが宿っている。それは、実践で出会う一人ひとりとどのように向き合っているか、今あなたが見ているものは何かと私たちに問いかける。

二つ目は、上述のオリジナリティを土台として、表現することの原理が書かれている点である。ことばとは何か、表現するとは何か、対話とは何か、なぜ表現するのかなど、人とことばの関わりが徹底して考察されている。また、その答えは生きること、他者と関わること、市民となること、社会をつくることなど射程が広い。そのため、自分はどう考えるか、自分の実践はどうか、何を目ざしているのか、それはなぜかなど、様々に自問自答し、思考することを促す。私自身は、「自分の〈ことば〉」が聴けているかという問いを突き付けられた。それは、私のことばも含め、「自分の〈ことば〉」が響き合う場が築けているかという問いでもある。オリジナリティとも関わる問題である。オリジナリティめがけて、ともに歩んでいるか。様々に自問自答し、考え、次につなげていかなければならない。

本書の課題は、本書で示された考えをどのように具体的活動につなげていくかという点である。ただし、著者はこうすればよいというものはないと述べている。したがって、これは著者への応答として、私たち一人ひとりが考えていかなければならない課題と言える。家庭で、学校で、職場で、地域で、社会で、「自分の〈ことば〉」で語り合い、生き合う場をいかに創造していくか。様々な立場・環境にある人々からの発信にも期待したい。

4．おわりに

本稿を書くことは、まさに本書との対話、さらにはその向こうに控える著者との対話であり、思考と表現の往還により少しずつかたちになっていった。自分のことばをつくることができたかどうかは、はなはだ心もとないが、可能な限りの応答を試みた。一方、外に目を向けると、その間世界では日ごとに緊張が高まり、ついに対話の試みもむなしく悲劇へと至った。人間の様々な欲望が生む強大な暴力の前に、ことばを失いそうになる。日々自分が取り組む実践はあまりに小さく、非力だ。しかし、それでもなお、だからこそ、自分のことばをつむぎ、希望をつむぎ、未来へとつないでいかなければならない。本稿が公開されるころ、どのような光景を見ているだろうか。著者のことばが胸に響く。

> 表現するという行為は、（中略）ことばによって他者を促し説得し交渉を重ねながら少しずつ前にすすむという行為、つまり、暴力に訴えない、ことばの活動として人間ならだれにでも必要な相互関係構築の行為なのです。（p.130）

対話を止めてはならない。

（こが　かずえ　早稲田大学日本語教育研究センター）